

主 題：自由人として生きる①

聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 5章1-12節

これまで私たちはⅡペテロを学んできましたが、今朝はガラテヤ5：1-12までのみことばを一緒に学んでいきたいと思えます。

ペテロは私たちにクリスチャンというのは自由人であると教えてくれました。パウロは私たちにこの手紙を通して、自由人とはどのように生きる者たちなのかを教えてください。それを今私たちは一緒に見て行くわけです。このガラテヤ人への手紙というのは、パウロが、そしてバルナバが第一次宣教旅行の際に、小アジア、現在のトルコに立ち寄ります。そしてそのトルコの特に南部に誕生したアンテオケ、イコニオム、ルステラ、そしてデルベの四つの教会に対してパウロはこの手紙を送ったのです。

5：1を見ると「キリストは、自由を得させるために、私たちが解放してくださいました。」とあります。自由人となったクリスチャンたちはそれにふさわしく生きなさいと、パウロは勧めます。このガラテヤ人への手紙は「自由」が強調されています。「自由」ということば、名詞形と形容詞形で9回出てきています。自由人としてどのように生きるのかをパウロが教えます。

続けて1節を見ると、「ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」とあります。パウロがあえてこういう表現を使ってメッセージを送ったのは、教会の中でこういった働きが起こりつつあったからです。クリスチャンとして、自由人として生きていこうとするクリスチャンとしての歩みを妨げようとする働きが教会内に存在していました。だからパウロは自由を得たクリスチャンが再び奴隷として生きないようにと願ってこのメッセージを記したのです。

パウロは、今私たちが見ていこうとする5章の、特に12節までの中に二つの警告を記しています。1-6節までは誤った教理に対する警告であり、7-12節は偽りの教師たちに対する警告です。繰り返しますが、このメッセージを送った目的は、クリスチャンたちが惑わされることなく、救われた者としてふさわしく生きるため、自由人として生きるためにはどう生きることが必要なのかを教えることです。一緒にみことばを見てまいりましょう。

A. 誤った教理に対する警告 1-6節

1. 「行いによる救い」・「割礼」 1節

まず1節に、行いによる救い、特に割礼ということが教会の中に教えとして入ってきたことを私たちは覚えなければなりません。実はユダヤ教徒たちは救いを得るためには、主イエス・キリストを信じるだけでは不十分で、割礼を受けることが必要だと教えていました。あのエルサレム会議と言われる会議でもそういう話が話題に挙がっています。使徒15章に出てきますが、「ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。』と教えていた。」(1節)と書いてあります。ユダヤ人たちは確かにそういった教えをしていたのです。また5節には「パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、『異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである。』と」、こんなことを言っていました。ですからまず皆さんに覚えていただきたいのは、こういった教えが存在していたということです。イエス様を信じるだけではだめで、律法を守らなければいけない、特にこの「割礼」を受けなければ救いにあずかることはないのだという教えがあったということです。

もちろん「割礼」が罪だと言っているわけではありません。パウロもテモテに対して「割礼」を受けるようにと指示しています。なぜパウロがそのような指示をしたかということ、「割礼」を受けることによって、テモテ自身が「割礼」を受けた者たちのところにも出て行くことができるようになり、より多くの宣教の機会を得るためにです。「割礼」自体が問題ではない。しかしこのような偽りの教師たちは、イエス様を信じる信仰だけでは不完全で、どうしても救いには「割礼」が必要だと教えたのです。この教師たちは、神がこの肉の「割礼」よりも心の「割礼」を求めておられたことを全くわかっていなかった。肉の「割礼」は何にももたらさない。でも心の「割礼」は人を救いへと導くものです。つまり救いの話をしているのです。本当に行いなのか、それとも信仰なのかという話です。私たちはこのことについて見ていきます。

2. 「救世主か割礼か」 2-4節

1) 「無益なキリスト」 2節 ガラテヤ3：1-3

2節を見ると、救世主と「割礼」を天秤にかけています。2節「よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないので

す。」とあります。この「益」というのは「利益」とか「役に立つ」という意味です。この対象となっているのは未信者たちではなくて信仰者たちです。クリスチャンたちがこういった誤った教えを受け入れてしまう危険性がありました。そこでパウロは、もしあなたが「割礼」を選択するのであれば、それは主イエスが無益だと公言することになると言うのです。「イエスが無益」、イエスが役に立たない、これは大変大きな罪です。なぜならイエス・キリストの十字架はどんな人でも、どんな罪人でも赦す力を持っているのです。それが役に立たないとするのなら、どれほど神に対する冒瀆であるかです。

もしあのイエス・キリストの十字架がある人々しか救えないとするならば、イエス・キリストは救い主でなかったということです。イエス・キリストは救いを求めてくるならばどんな罪人でも救ってくださるのです。あの十字架はその力を持っているのです。でもパウロがここで言うのは、もしあなたがキリストではなくて律法を選ぶのであれば、あなたがやっていることはイエス・キリストは全く役に立たない存在だ、救いをもたらさないだけではない、私たちが求めている本当の幸せを彼は与えることができないのだと公言することになると言うのです。罪の赦しを得ようとしたら、自分で一生懸命努力するか、救い主のところへ行くかです。そして我々は、自分で一生懸命努力しても救いを得ることがないことを知っています。日々の生活において私たちが求めていることは本当の幸せを持って生きることです。でもその幸せを得るためには私たちはそれを与えてくれる神のもとに行かなければいけません。我々人間の問題はそれ以外のところにそれを求めようとしているのです。イエス様が私たちにとって利益をもたらさない、とんでもない話です。この方だけがそれをもたらすのです。ですからパウロはまずここで信じていながら律法に戻って行こうとするような人々に対して、それがどれほど大きな罪なのかを明らかにするのです。パウロはあたかも何の役にも立たないもの、何の益ももたらさないものをどうしてあなたたちは選択するのかと言っているかのようです。

2) 「律法遵守の必要性」 3節

3節「割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。」、「割礼」の大切さ、「割礼」を受けることによって救いにあずかると思っている者たちに対して再びパウロは「あかし」をします。この「あかし」をするというのは別の箇所では「宣言する」と訳されていることばです。高らかに宣言する、よく聞きなさいとパウロは言うわけです。もしあなたが「割礼」を受けようとするなら、「割礼」が必要だと思っているならば、それは「律法の全体を行なう義務」が生じるのだと。この「義務」ということばは「借りる」とか「負債者」という意味です。「負債者」というのは自分の負ったその負債のすべてを返済しなければならない責任、義務があります。借金をしたらその借金を返さなければいけません。パウロはそのことばをここで使っているのです。つまりもしあなたが律法を守ることによって、完全な救いを得ようとするのであれば、割礼だけではなくそれ以外すべての律法を守る義務があなたには存在するのですよ。一部の借金を返して、それですべての借金を返したことになるから、全部返さなければいけません。あなたが律法を守ることによって救いを得ようとするならば、覚えておかなければいけないのは一部の律法を守ったからそれでいいというのではない。すべての律法を守らなければいけませんとパウロは言います。

ヤコブも同じことを言っています。「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。なぜなら、『姦淫してはならない。』と言われた方は、『殺してはならない。』とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。」、ヤコブ2：10-11です。これだけの律法を守っているからこれで十分でしょうとは決して言えない。律法を守って救いを得ようとするのだったらすべての律法を完璧に守らなければいけません。一つでも破ってしまったら、あなたは違反者になると。まさにパウロが言っていることと同じことをヤコブは教えるのです。

3) 「自力のみへの信頼」 4節

そして、4節を見ると「律法によって義と認められようとしているあなたがたは、」、またここで律法によって救いを得ようとしている人々に対して、その選択はまさに自分の力のみを信頼することになると言います。それはどういう意味なのか、これから見ていきます。

(1) 「キリストの無益さの公言」：「キリストから離れ」 ガラテヤ2：16、使徒4：12

「キリストから離れ、」ということばが続いています。救いを得たいと思ったら、イエス様から離れてどうやって救いを得ます？神の祝福を得たいと思ったら、イエス様から離れてどうしてその祝福を得ることができます？私たちはイエス・キリストを信じることによって救いをいただいたのです。神の祝福をいただくためにイエス・キリストに従っていくのです。彼らがキリストではなくて律法を選択することは、まさにキリストから離れることであると。なぜその人に神の祝福があるか。先ほども見てきたように、その行動はキリストが無益だということを明らかにすることになるからです。一生懸命何かを探している人がイエス様のもとに来て、「いや、ここには答えはないわ」と言ってそこから離れていく。救いを求めるならば、私たちは救いを与えてくださるまことの救い主のところに行かないといけ

ない。本当の満足を得たいと思うのなら、本当の満足を与えることのできる、まことの神のところに行かないといけない。彼らは神よりも律法を選ぼうとした。それはまさにキリストから離れることだとパウロは教えます。

(2) 「神の恵みを拒む」：「恵みから落ちてしまった」

そして同時に、「恵みから落ちてしまったのです。」と続きます。これは「それから遠のく」とか「失う」という意味のことばです。パウロはここで律法と恵みは決して相容れないものだ、つまり私たちはどちらか一方しか選択できないと言っています。律法を選ぶのか、恵みを選ぶのか——。もしあなたが恵みを選ぶならば、神の御力によって救いだけでなく霊的成長という祝福を神様からいただくのです。しかし、もしあなたが律法を選ぶならば、それは神の恵みを拒むということで、その結果、神の祝福を失ってしまうということです。

① 「救い」 ヘブル 2 : 3

「私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにしたばあい、どうしてのがれることができますよう。」、ヘブル 2 : 3 です。このイエス様の備えてくれた救いを拒んだら、一体何によって救われることができるかです。唯一の救い主であり、その救い主によって設けられた唯一の救いです。それを拒む人にどうして救いが与えられるかです。

② 「成長」

また同時に、我々を罪から救ってくださったこの神の恵み、イエス様を信じることによって神は私たちを罪から救い出してくださいました。この神の恵み。それはただ救いを与えるだけではなくて私たちに信仰の成長をもたらします。I コリント 15 : 10 で「神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と書いてあります。つまりパウロが言っているのは罪からの救いも神が一方的に私に与えてくださった恵みであり、信仰の成長というのも神からのギフトなのだ、恵みなのだと教えるのです。その恵みからあなたは落ちてしまった、それから遠のいてしまった。それを失ってしまったと。いずれにしろ、律法を選ぶということの大変大きな罪をパウロは教えようとするのです。律法を守ること、どんな善行を積むことでもそれによって救いを得ることはない。このことはもう皆さんもはっきりとわかっておられると思います。

パウロは、今私たちが見てきたこの4節で、「キリストから離れ」とか、「恵みから落ち」というのは救われているあなたが救いを失ってしまうということをお教えているのではないのです。神によって救いにあずかった者たちは絶対に救いを失うことはない。問題は神によって救いをいただいているかどうかです。そのことはこの後でパウロが教えてくれるのですが、では何を言っているかということ、もしあなたが誤った生き方を選択するならば、あなたは祝福を失ってしまうということです、霊的な力を失ってしまうということです。皆さんそれを経験したことはありませんか？あなたの信仰が成長しないとか、あなたの信仰が弱っていく原因となっているのは、あなたの主に対する従順な歩みではない、間違いなくあなたが神から離れているからです。神のみことばに触れることもない、神のみことばに従って生きていこうともしない。そうすれば必ず信仰は弱っていきます。パウロが言いたいことはそういうことです。

確かに私たちは神様に対して忠実に歩んでいなければ信仰において成長しないことは頭でわかっていますが、今から私たちが見ていくことはひょっとしたら皆さん、正しく理解しておられない可能性がある。自分は律法、つまり行いによって救いを得ようと思っただけで、でも同時に、あなたは信仰生活において恵みではなくて、実は行いを選択して歩んでしまっている可能性があるのです。実は大変多くのクリスチャンたちが気づかないうちにそのような歩みをしているのです。どういうことなのか今から説明します。

多くの、いやすべてのクリスチャンたちは間違いなく神に喜ばれたいという思いを持っています。もっと言えば神様を喜ばせたいという思いがある。それを持っていなければそれは信仰自体がクエスチョンです。ここはいいですね？神によって救われた者たちは神を愛するし、神に喜ばれたいという思いを持っている。ところが問題はその次なのです。そういう願いを持っているのですが、ではどうやって神様を喜ばせるかと言った時に、行いを優先する人々というのは、自分の行いによって神を喜ばせることができると信じてそのように歩んでいるのです。律法によって救いを得ようとしていた人たち、行いによって救いを得ようとしていた人たち、どこの国でも同じです。かつての私たちを振り返ってみると、一生懸命善行を積むことによってこれだけいいことをしているからきっと私は天国に入れるに違いないと思っただけで、私はそう思っていました。これだけいいことをしているから、そんな悪いことをしていないから、そういった考え方が実は信仰を持ったクリスチャンたちの間にも入ってくるのです。

どんなふうにか——。自分の行いによって、私は神を喜ばせているのだと自分勝手に信じる信仰者たちです。例えば私は毎日デボーションを持っています。だから神は私を喜んでくださっている。私は毎日聖書を読んでいますから神は私のことを喜んでくださっている。私はこれだけ奉仕をしていますから、神は私のことを喜んでくださっている。神は私がどれだけの慈善活動をしているかご存じだから、きっとそれを神は喜んでくださっている。私は礼拝を休まないから、きっと神は私のことを喜んでくださっていると。デボーションを持つことも、聖書を読むことも、奉仕をすることも、礼拝をしっかり守ることも大切なことです。でも私たちが気をつけなければならないのは、こういうことをしているからきっと神は喜んでおられるのだと自分勝手に思っているところです。私たちが気づかなければいけないのは、私たちのどんな善行も神の前には不十分で喜ばれないということです。こうして我々が教会の礼拝に来ていますが、本当に100%神が間違いなく喜ばれる礼拝を捧げています？礼拝中にいろいろな思いが自分たちの脳裏に浮かんできます。自分の前に座っている人たちを見ていろいろなことを思ってしまったりする。本当は神だけを見上げて、恐れを持って礼拝をするべきこの時間が、実はそうではない。だから自分たちが選択したいいろいろな行いというのは、自分を満足させたとしても神を満足させることはないということです。

でも恐ろしいことは、私はこれだけのことをしているから霊的なのだ、あの人たちに比べて私の方が信仰において勝っているのだ。こういう人々は自分と違う人々をさばいてみたり、ひょっとしたら彼らより自分の方が勝っていると思って勝手な信仰の優越感に浸ってみたり。これらすべては恵みによって歩んでいるのではないのです。なぜかというと、律法によって救いを得ようとした人は自分の行いによって神のご好意を得ることができると信じて一生懸命努力したのです。この信仰者たちは一生懸命自分が何かをすることによってきっと神のご好意を得ていると思っています。ここが私たちの一番大きな問題点なのです。そんなふう生きなさいとは神は教えていないのです。しかし、残念ながら私たちはそんなふう生きてきたのです。絶えず人々と自分を比較する中に生きてきた。信仰だってそうです。私たちがもし例えば信仰歴を誇っているのだったら、意味のない話です。我々がどんなことを知っている、どれだけのことを知っているかと誇っているのは空しい話です。我々がどんな奉仕をしてきたのかはどうでもいい話です。神はそんなことに全く関心を払っておられない。そういうことに私たちが頼っているのはこういうことをしてきたからきっと私たちは神に喜ばれていますとか、こういうことをしていますから私は神に喜ばれているのです。自分の行いによって神のご好意を得ているのだろうと信じて一生懸命努力しているのです。これは律法によって救いを得ようとしていた人たちと同じことをしているのです。

3. 「信仰のみによる救い」 5-6節

1) キリストに似た者へと変えられ、神とともに永遠を生きる希望

では私たちはどうやって生きていきたいのかです。自由人というのはどうやって生きるのかです。6節を見てください。「キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことでなく、」、ここで再びパウロは「割礼」の無益さを教えています。「キリスト・イエスにあっては」の「あって」という前置詞は、「その区域」というか「領域」を指しています。このイエス・キリストのうちだけに救いがあるということです。5節に「熱心に抱いている」とあります。このことばは「待ち望んでいる」ということばです。新約聖書の中にさまざまところでこのことばが使われていますが、特にローマ8：23には「私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」と記されています。罪を持った我々信仰者は、あえて罪を持ったと言ったのは罪は赦されたけれども、肉の体を持っていますから、悲しいことに罪との葛藤を経験しているし、罪に負けます。我々信仰者はどんな希望を持っているかということ、この5節が「義をいただく望みを熱心に抱いている」と言うように、私たちはキリストに似た者に変えられる、その日が来ることを待っているのです。

パウロたちがみことばを通してイエス・キリストにお会いすることを待望していた様子を記しています。パウロはピリピ1：23で「私は、その二つのもの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」とあります。パウロはクリスチャンたちとともに地上にいることと、神のもとに上がることのどっちがいいのかと言うと、当たり前ですが、神のもとにあることの方がはるかに優れていると言っています。それは今の大変な困難や苦しみ、迫害から一日も早く解放されたいからこういう願いをしたのではない。パウロが神のもとに行きたいと願っていたのは、神のもとに行った時に初めて神を悲しませる罪から解放されるからです。栄光の体をいただくその時まで私たちは罪との葛藤を日々経験し、神を悲しませることばかり選択している。そう思っている信仰者はたくさんいるでしょう。だからパウロが言うように彼は一日も早く栄光の体をもらいたかったのです。そうすれば神の御名を汚すことがないからと。当然私たちは主のもとに上がることの方が神にとって、周りの人々にとって最善であると思います。パウロが教えてくれたのは、我々

クリスチャンはこの罪の体から解放されて、キリストに似た栄光の体をいただき、そしてその神ご自身とともに永遠を過ごすことができるのだ、この希望を持って生きているのです。その日を待望しながら生きている。私たちはこういうふうに変えられたのです。こんなふうにあなたは信じなければいけない、こんなふうにずっと思い続けなければいけないではなくて、神がその希望を下さった。神がそんなふうに変えてくださったのです。

2) 御霊の働きを通して義をいただく望みを持つ者へと生まれ変わる 6節

こんな希望を私たちは抱くようになったのですが、それには過程、プロセスがあります。5節「私たちは、信仰により、」と書いてあります。行いではないのです。イエス・キリストを信じる信仰によってです。しかも「御霊によって、」とあります。私たちを罪から救い出してくださいました。それは聖霊なる神様の働きです。そして私たちを日々成長させてくれる。これも聖霊なる神様の働きです。そして、この救いにあずかった私たちはイエス様にお会いしてこのような栄光のからだをいただくのだという希望を持って毎日を生きる者へと神は私たちを変えてくださったのです。そしてその毎日を生きるために、聖霊が働いてくださっているのです。ですから、クリスチャンとして聖霊なる神様の導きに従い、また聖霊なる神にすべてを委ねて生きていくことなのです。5節でパウロが言ったように、信仰によって、そして御霊によって私たちは新しい希望を持つ者になった。そして希望を持つだけではない。その聖霊なる神様の助けによって私たちは日々の生活を生きて行くのです。どんな生活かと言うと、神の栄光を現すという生き方です。真に神に喜ばれる歩みを行うという生き方です。

◎ 救われた者にとって最も大切なこと：愛によって働く信仰

みことばをもう一度見てください。6節「キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことでなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。」とあります。「愛によって働く信仰だけが大事」なのだとかクリスチャンたちにとって最も大切なものは何かを教えてください。少し復習すると、主イエス・キリストを信じた時に、神があなたを救ってくださいました時に、あなたは神に喜ばれることをしたいという願いを持つようになった。神様を心から愛する人に生まれ変わった。イエス様にお会いして栄光のからだを早くいただきたいという希望を持って生きる人へと生まれ変わった。これはクリスチャンの特徴です。神はあなたを造り変えてくださった。救いというのはそういうものです。そしてエペソ2：10が言うように「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」と。つまりクリスチャンというのは良い歩みをする者たち、良い行いをする者たちです。良い行いをするによって救われるのではなくて、救われた者たちは良い行いをしていく、ペテロも前回私たちにそのことを教えてくれたのです。私たちのこの新しい歩みというのは、信仰によって得たものです。そして信仰によってこの恵みにあずかった私たちはこの神様に常に信頼を置いて、その教えに従うことによって、ただ神が喜ばれる行いをするだけではなくて、神が喜ばれる心からの行いが生まれ出てくる者へと成長するのです。パウロは「愛によって働く信仰だけが大事」だと言いました。つまりもしあなたが神のみことばに従って生きて行くなれば、確実に神はあなたを変えていかれるのです。これが霊的に成長して行くということです。イエス様に似た者に変えられていくということです。そうすると、あなたが行う良い働きというのは、ただ良い働きだけではない。その働きを生み出す正しい心がどんどん成長することによって、まさに愛に満たされた、愛に動機づけられた、神がお喜びになる良い行いをますますあなたが実践する人へと変えられていくという話です。

大切なところなのでもう一回まとめます。ある信仰者たちは、神に喜んでいただきたいという思いを持って一生懸命自分の努力によって良い行いを実践しています。またある信仰者たちは神に喜んでいただくために御霊を与えてくださる愛によって良い行いを行っている。どちらの信仰者も神に喜んでいただきたいという願いは同じです。しかし彼らの違いは、自分の努力で神を喜ばせようとしている心と、神に忠実に従うことによって与えられる愛によって神を喜ばせようとしている心、全く違う心がそこにはあるのです。神様に喜んでいただくこととするならば、何をやるかよりもどんな心でそれをやるかが大切なのです。良い行いは正しい心からも正しくない心からも生まれて来る可能性はあります。良い行いは正しい心からだけではなくて、正しくない心からも生じる可能性はあります。しかし、神が喜ばれる良い行いは、正しい心からしか生まれてこないということです。本当に神を喜ばせたいと思ったら私たちがどう思うかではないのです。神が喜ばれることをするしかないのです。しかも神が喜ばれるこのみことばに従うことによって我々が変えられていき、我々が神に対するより強い愛を持って、神様の前に喜ばれることをしていこうとする。その話をしているのです。自分の行い、自分の努力によって神様のご好意を得ようとしている人は決して神様からの賞賛を得ることはないのです。それが証拠にそういう歩みをしている人たちの間ではお互いを比べ合ってみたり、批判してみたり、さばいてみたり、そういったことが起こるからです。

ですからひとりひとりの信仰者が自分に問いかけなければいけないのは、あなたの良い行いが神様への愛から生まれているのかどうかです。あなたは確かにいいことをやっている。デボーションを持ってみたり、聖書を読んだり、すべて素晴らしいことです。でもそのすべての良いことが本当に神への愛から生まれていることなのかどうかをみずから問いかけてみることです。礼拝に来ることは素晴らしい。でもなぜあなたは礼拝に来ているのかです。神を愛するから礼拝に来ているのなら神は喜んでくださる。神を第一に愛するから、何ものよりもこの時間が大切である。そして神を礼拝する者として生まれ変わった私たちは、常に神を礼拝する、そういう生き方をしていこうとする。なぜかという、それが神が喜ばれることだからです。パウロはIコリント13：1-2で「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。」、どんな信仰を持ってしようと、どんな素晴らしい働きをしてしようと、愛がなかったら空しいと。だから皆さんがどんなに素晴らしい奉仕をしてしようと、どんなに素晴らしい歩みを普段していようと、問題はそれが神への愛から生まれているかどうかだと。それを神は見ておられる、それを神はお喜びになると言うのです。

ジョン・ストットという先生は「キリスト者生活とは、信仰の生活であるだけでなく、御霊にある生活でもあるのです。そして使徒が後ほど説明しているように、我々のうちに内住する聖霊は、愛の善行を生み出すのである。」と語っています。聖霊がそれを生み出すのなら、聖霊に従って生きていくことが必要です。聖霊に働いていただかなければいけないことは当たり前のことです。私たちがその働きをとどめて自分でやろうとしているならば、神が望んでおられることを自分たちで達成することはできないのです。

B. 偽教師に対する警告 7-12節

1. 「偽りの現実」 7-8節

パウロはこの大切なことを教えた後、7-12節に今度は偽りの教師に対する警告があります。こういった偽りの教えが存在していることをパウロは言います。「あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。」、この偽りの教師たちは真理を惑わしていたのです。そしてクリスチャンたちを惑わしていた。パウロが言うようにこのクリスチャンたちはしっかりと走っていたのです。信仰者として正しく歩んでいたのです。パウロとともにいた時に問題はなかった。でもパウロが去った後、こうした教師たちが入り込んで来て混乱をもたらした。どこでも同じことがなされています。そして、この偽りの教えに惑わされてしまう。だれがそんなことをしたのですかとパウロは7節で言います。8節「そのような勧めは、あなたがたを召してくださった方から出たものではありません。」、それは神から出てものではないと。なぜなら神に背く教えをするわけです。

2. 「偽りの危険性」 9節

そして9節「わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。」、イエス様はこのような例えを何回もお話になった。マタイ16：6で「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」とあります。小さなパン種が全体に広がるように、彼らの偽りの教えが大変大きな問題をもたらすことをイエス様は警告されたし、あえてパウロはここでそのような偽りの教えに対する警告を發します。

3. 「偽り者の運命」 10-12節

そして、10-12節を見ると、こういった偽り者の運命が書かれています。「私は主にあって、あなたがたが少しも違った考えを持っていないと確信しています。」、パウロは今でもこのクリスチャンたちが彼と同じことを信じていると確信していました。「しかし、あなたがたをかき乱す者は、だれであろうと、さばきを受けるのです。」、パウロがさばきを与えようと言っています。彼らは神からさばきを受けようと言っています。パウロはこのようにせ教師たちは神様からのふさわしいさばきを受けることを知っているのです。

そして11節「兄弟たち。もし私が今でも割礼を宣べ伝えているなら、どうして今なお迫害を受けることがありましょう。それなら、十字架のつまずきは取り除かれているはずです。」、パウロは今も自分自身がさまざまな迫害を経験していることを言っています。なぜかという、それはユダヤ人たちにとってつまずきである十字架を語ったからです。つまり救いは信仰によってのみだ、律法によるのではないということをお説教したからです。それを聞いたユダヤ人たちは、「こいつは何を言っているのだ」、「律法を守ることによってのみ救いを得るのだ」と、つまずいたのです。ですからパウロはここで場所は違えど自分自身がこういった偽りの教師たちからの迫害を受けていることを明らかにします。確かに彼らにとってはこの十字架はつまずきでしょう。しかし、我々信じる者にとっては救いを得させる神の力です。この十字架のみわざによって、主イエス・キリストが十字架で命を捨ててくださったことによって我々の罪は永遠に完全に赦されたのです。でも悲しいことに律法によって、行いによって救いを得ると信じている

者たちにしたら、この教えはつまずきなのです。まさにそのことをパウロは言うのです。

そして最後12節「あなたがたをかき乱す者どもは、いっそのこと不具になってしまうほうがよいのです。」とあります。新改訳の第三版では「いっそのこと切り取ってしまうほうがよいのです。」と訳しています。非常に厳しいことばが使われていることは確かです。ただ12節を読むと、パウロはこういったにせ教師たちに対して、神から呪いがあるようにとか、神から特別な厳しいさばきが今すぐ起こるような、そんな怒りに満ちたメッセージを記したわけではないということです。なぜなら10節で見たように既にパウロはこの偽りの教師たちには必ず神の審判があることを知っています。また、「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。」、これはパウロが書いたローマ12:19です。どんな敵であったとしても、彼らに復讐してはならない、神に任せよと。我々信仰者はたとえどんな人であっても、どんな敵であっても、どんなひどい人であっても神が喜ばれることをなしていきなさいと。パウロは憎しみに満ちて、怒りの呪いのメッセージを書いたのではないのです。

パウロは最後に非常に面白いことを言うのです。この「不具」というのは、新改訳第三版が訳したように、からだの一部を「切り取」ということです。つまり去勢の話です。なぜこのことばをここで使ったかと言うと、この当時この地方においては「キューベレ神」という偶像を崇拝する信仰がありました。この偶像に仕える祭司たち、また熱心な崇拝者たちはみずから進んで去勢して不具にするという習慣があったのです。まさにそれがより霊的な者となるための印であるかのように。そこでパウロはあえてこう言ったのです。「もし割礼を受けることによってより神に喜ばれる者になると言うなら、あの偶像崇拝者たちがやっているように、いっそのこと去勢したらもっと神が喜んでくださるだろうから。」と言っているのです。こうして彼らの愚かさを明らかにしたのです。

律法によって救いを得よう、行いによって神の祝福をもらおうということがいかに愚かなことであるか、そのことをパウロは明らかにしたのです。救いにあずかった皆さんは自分の行いによって救いに預かったのではない。神の恵みなのです。救いにあずかった瞬間から神はあなたを変えようとします。神はあなたを成長させていこうとする。その成長の働きにおいても我々は恵みに基づいて生きていかなければいけない。先ほど見て来たように自分の勝手な考えでこうすれば神様は喜ばれるだろうと思って、そういう行いに頼った信仰生活をやめなければいけないということです。私たちはそういったさまざまな行いから解放された自由人なのです。恵みによって救われ、恵みによって生きて行く自由人なのです。神のみことばに神の助けをいただきながら従い続ける時に主はその信仰者を霊的に成長させてくださるのです。私たちはこうしなければならないとかこうしてはならないというルールから完全に解放されて自由の身となったのです。だから自由人として神への感謝と愛をもってそのみことばに従っていくのです。繰り返しますが、神があなたに望んでおられること、神が喜ばれることは、あなたが神のみことばに従うことです。これ以外にないのです。あなたが勝手に考え出すことではない。ですからこういうことを最後に言うことができます。神を喜ばせる、クリスチャンであればみんなそのことを望んでいるはずですが、でも神を喜ばせることを人間の方法でなすのか、神の方法でなすのか、そのことを考えなさいと言うのです。神様を愛するゆえにあなたがすべてのことをしておられるのかどうか。そうでなかったら誤った歩みを悔い改めることです。神を愛するゆえにあなたがすべてのことをしておられたら、それは神様に喜ばれることです。ますますそのようにすることです。でもそのように愛において成長するためには、神のみことばに従い続けることです。恵みでもってあなたを救った神は恵みでもってあなたを助け、そのような歩みの実現できるようにあなたを助け続けてくださる。そのように生きることです。どうかそのような歩みをもって神様の栄光を現し続けていきましょう。

《考えましょう》

1. 「律法を守る」といった「人の行い・努力」によっては神の祝福を得ることがありません。その理由をお書きください。
2. 4節の「キリストから離れてしまったのです」を説明してください。
3. 4節の「恵みから落ちてしまう」生き方がどのようなものかを具体的に記してください。またどうしてその生き方が問題なのかを記してください。
4. 6節の「愛によって働く信仰だけが大事なのです」を説明してください。どうしてこのことが大切なのでしょうか。